

〔研究ノート〕

佐竹本三十六歌仙絵の表装

屏風絵や掛幅画が、展覧会図録や書物に掲載される場合、表装部分はカットされてしまうことがほとんどです。しかし、表装は、絵の持ち主が絵のために誂えた晴れ着のようなものです。その表装をみることも、美術館に足を運んで実際の作品の前に立つ楽しみのひとつです。

かれこれ10年以上前になりますが、京都国立博物館の展示室で、とても変わった表装をみたことがあります。それは、中世の屏風が襖だったと思われる画面の一部を切り取って作られた「坂上是則像」(図1)の表装でした。「是則像」は「佐竹本」と呼ばれている有名な三十六歌仙絵のうちの二図です。

表装に使われた画面には、金箔や金砂子、雲母をふんだんに使った雲や霞、そして雪山の景色を確認することができます。霏々と降りしきる雪が白い胡粉の飛沫で表現され、山肌はむろん、まばらに生える松の幹にも、雪がこんもりと積もっています。山中に雌雄の鹿が群れ遊ぶ、深山の気配が漂うこの絵は、まぎれもなく、是則の詠歌「みよしののやまの白雪つもるらし ふるさと寒くなりまざり行く」に合わせて選ばれたものでしょう(図2,3,4)。

このような雪をかぶった松や、画

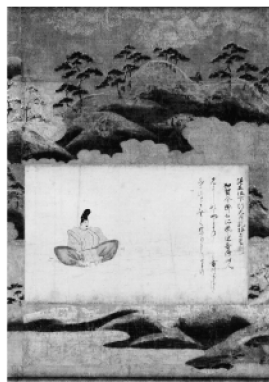


図1 坂上是則像 文化庁蔵



図2 同左部分



図3 同左部分



図4 同左部分

翁のもとで絵巻を解体して分売されたからです。これは古美術史上に残る1919年の出来事でした(1)。

その事件の証人の一人である高橋義雄氏の著書『近世道具移動史』によれば、歌仙絵を入手した人々は、それぞれの歌仙絵を掛幅に表装して、1921年4月の鈍翁主催の茶会に持ち寄りました。集まったのは25幅。とくに新調された表装が注目を集めました。高橋氏は、「歌仙の表装は故実に精しく又多く古裂を所持して居た三好竹馬と云える経師屋が一人で数幅を手を掛けたが、其他各地の大経師も意匠を凝らしてそれぞれの表具を施したる者が、一堂に陳列せられた盛観は又一入の眺めであった」(2)と記しています。

「是則像」「兼盛像」の中世絵画で表装するという型破りな発想は、古裂を蓄え故実に精通していた経師屋のものではなさそうです。あらためてこの2点を入手した人を確認すると、「是則像」は鈍翁の弟である益田英作、「兼盛像」は京都の古美術商土橋嘉兵衛でした。この土橋氏について、高橋氏は、絵巻解体を提案した「一種独特の奇智ある」(3)人物と評しています。

まったくの想像ですが、私は、益田家とも親しかったこの古美術商こそ、中世絵画を使う表装の発案者ではなかったかと考えています。まず、英作の「是則像」のためにふさわしい古画を選び、その余りを自分の「兼盛像」に使ったのではないのでしょうか。「兼盛像」に使われている画面がごくわずかであることから推測すれば、この雪山を描く中世絵画は、土橋

氏が入手した段階で、すでに原形をとどめない断片となっていたでしょう。そうであれば、佐竹本の表装に使われたおかげで、この中世絵画の断片は、現在まで命を永らえることができたのだといえそうです。表装に再活用してくれたことを感謝しなければなりません。

残念ながら、私は佐竹本の表装のすべてを確認していません。しかし、最近出版された掛幅全体の写真に掲載する展覧会図録(4)や、当館所蔵の「小大君像」をみるかぎりでは、通常の古裂による表装が多数を占めています。それでも、ひょっとしたら、ほかにも古い絵を使った表装があるかもしれないと、淡い期待をひそかに抱き続けています。

(泉万里)

※図1~4は、東京国立博物館編刊『歌仙絵』2016年より複製させていただきました。

- (1) 馬場あき子、NHK取材班著『秘宝三十六歌仙の流転——絵巻切断』日本放送出版協会 1984年
- (2) 高橋義雄著『近世道具移動史』慶文堂書店、1929年、237ページ
- (3) 同上 236ページ
- (4) 東京国立博物館編刊、土屋貴裕『歌仙絵』2016年